

CARMEN

カルメン

「自由」に憧れる女性のアイドル、カルメン

ビゼーの傑作歌劇、「カルメン」の題名役ヒロインは1875年(明治8年)にパリのオペラ・コミック座で生を受けて以来、つねに「いま」を生きている。軍隊に戻ろうとするドン・ホセ伍長を引きとめようと手の限りを尽くし、激しい感情を露にし、「リベルタ!」と叫び続ける。リベルタ。フランス語で「自由」を意味する言葉こそ、カルメンが150年近くにわたり、世界を魅了し続けてきた肝(きも)であろう。

1945年(昭和20年)。日本が戦争に負け、立ち直り始めたとき、軍国主義から民主主義への転換が叫ばれ、自由が強い説得力をもって語られた。1951年の日本に現れたカルメンは、高峰秀子に乗り移り、おりんという田舎娘を芸名「リリィ・カルメン」のストリッパーに変身させた。日本初の総天然色(オールカラー)映画、「カルメン故郷に帰る」(木下恵介監督)の音楽を担当したのは監督の実弟である木下忠司と、若き日の黛敏郎だった。昨年亡くなった名女優、高峰秀子の存在は眩しいばかりで、戦後の開かれた日本社会に現れた、自由を謳歌する女性の象徴と受け止められた。

この映画が封切られた年、ハーフの神秘的な歌手カルメン・マキが神奈川県鎌倉市で生まれた。17歳で劇団「天井棧敷」に加わり、1969年(昭和44年)、世界に吹き荒れた学生運動の嵐が敗北感とともに終息へ向かう中、恩師の寺山修司が作詞した「時には母のない子のように」で歌手として羽ばたいた。その5年後に「私は泣いています」をヒットさせた1歳年少の歌手、リリィとカルメン・マキが何故か、リリィ・カルメンの「娘」と思えるような世相の移り変わり。そして77年、すっかり安定志向の定着した日本社会に2人組アイドル、ピンク・レディーが「カルメン77」で再び、衝撃を与えた。

オペラ「カルメン」を上演する難しさは、パリもセビリアもハバナも東京もひっくり返して、「いま」の自由を最大限に生きる女性の魅力を嫌味なく、最大限に、現代の観客へ届ける手腕に集中する。首都オペラに集う気鋭の制作者、音楽家がいかに難題を克服するか、怖いながらも楽しみである。

池田卓夫・音楽ジャーナリスト



指揮：岩村 力



演出：三浦 安浩



小林 由佳



鮎澤 由香理



村上 敏明



大野 光彦



山口 佳子



斉藤 紀子



森口 賢二



飯田 裕之



矢田部 一弘



島田 啓介



岩田 健志



相澤 圭介



古澤 利人



今野 博之



澤崎 一了



根岸 一郎



渡辺 文子



美水 香り



小谷 円香



和久井 恵津子

